

《平成 31 年度 千葉市発達障害者支援センター運営事業経過報告》

前年度に引き続き、相談業務、講師派遣、サロン、子育てアシスト(年中児集団行動観察)、ペアレント・トレーニング、普及啓発を行っている。

1. 相談業務

(1)相談件数(R1.12.31 現在)

○実支援人数 710 人

○延支援件数 2,886 件

(2)相談支援・発達支援状況

相談支援・発達支援は日常生活(コミュニケーション、行動上のこと、学校や所属機関でのこと等)の様々な相談に応じている。また必要に応じて所属機関(保育所、幼稚園、学校、福祉施設、医療機関等)と連携・協働し、本人や家族が安心して過ごせる環境を作るための支援も行っている。

18 歳以上が全体の 49.5%であり、成人期以前と以降の相談の割合が概ね半々である。家族・本人からの相談が中心であり、家族の相談は情報提供や生活におけるの困難さへの具体的なアドバイスが中心であるが、本人の相談はカウンセリング的な要素の強いものが多い。

18 歳以上の相談では、本人を支える家族が高齢や疾病などの問題を抱え、キーパーソンである家族の協力が得られにくいケースが増えている。中でも知的障害を伴うケースでは、状況に応じてサービス利用に関わる手続きに同行する等の支援も行っている。昨今の核家族化や 8050 問題などを踏まえると、家族以外のサポート力を要するケースが増えることが予想される。本人が地域で安心して健やかに暮らしていくためには、切れ目のない支援が円滑に行われるように地域の関係機関とのより緊密なネットワーク作りが求められる。

18 歳未満の全相談のうち 22.9%が乳幼児期、小学生が 31.7%、中学生が 24.6%、高校生が 20.8%であった。幼児期から小学生ごろまでの相談では、身辺自立や対人関係、学習面の支援等、発達障害の特性から生じる問題についての相談が中心となっている。以前は幼児期の相談の多くが、受診前の不安や気がかり、就学に向けて等、特定の主訴についての単発での相談だったが、近年その内容が、今後の成長発達の見通しや日常生活上の関わりについての継続相談へと変化してきている。診断・療育に繋がっている児童は増えているが、「診断を受けたが、今後どうしていったら良いか分からない」、「対応に困っているが、具体的なアドバイスが得られていない」という声も多く、本人や家庭へのサポートが十分に行き届いていると言えない現状があると思われる。

中学生・高校生年代の相談は18歳未満の全相談のうち45.4%と、他の年代に比べて多い傾向が続いている。年齢相応のスキルや自主性を要求される場面が増加する一方、思春期を迎えることで身近な大人からのサポートを受け入れ難くなり、不適応リスクの高まりやすい時期であること、教科担任や部活動顧問など関わる大人が増えたり、本人と保護者が異なる考えを持つようになり、小学生年代よりも連携・協働が難しくなる側面が影響していると思われる。

(3)相談支援・就労支援状況

就労準備支援では、相談者の自己理解を深めることを主眼に置き支援を行っている。現状を整理し自己の課題に気付くことで必要な行動に移れるようサポートしている。千葉市発達障害者支援センターでの就労アセスメントだけでなく、医療機関の診断書や適性検査、千葉障害者職業センターの職業相談や評価を活用しながら、就職に必要な準備や相談者に合った働き方が考えられるよう相談を進めている。就職活動支援では、ハローワーク専門援助部門、ハローワークプラザちば、就労移行支援事業所等の各関係機関と情報共有をしながら一人一人にあった仕事が見つけられるようサポートしている。

今年度12月時点の就職者数は32名で内29名が障害者雇用枠での採用であった。主な就業先は一般事務(事務補助)、店舗スタッフ(接客・販売)、ホテルスタッフ、社内軽作業、研究補助、農園、公務員(事務補助、システム補助)等であった。採用人数は昨年度比で約3倍となっており、障害者雇用促進法の改正以降、精神障害者に続き発達障害者の雇用が進んでいることが伺われる。その一方で、休職、退職、転職される方も一定数おり、その理由として職場での支援体制が不十分である、合理的配慮が得られていない事が挙げられることが多い。長期的に働くために定着支援や関係機関と連携しての支援体制づくりが必要になると思われる。

2. 講師派遣

(1)外部から講師依頼を受けた研修(実技中心)

幼稚園・保育所(園)や各種学校、福祉施設、企業等を訪問し、機関からの各種の相談に応じている。相談の内容としては障害のある、または障害の疑われる者への対応や指導方法の助言が中心である。行動観察を行う他、関係者より日頃の様子等について聞き取りを行い、対応方法や支援方針について協議を行っている。対象者に関するだけでなく、周囲の環境調整等についても必要に応じて助言を行い、各機関の支援機能の向上を目指している。

すすくサポートや子育てアシスト等、他の事業も併用されている幼稚園・保育所(園)・認定こども園等から依頼を受けるケースが多い。また講師派遣のみでのつながりであっても、半年に1回など定期的に派遣を希望される例が増加している。

(2)子育てアシスト(年中児集団行動観察)

※外部から講師依頼を受けた研修(実技中心)の一環として実施

乳幼児健診では育ちにくさに気付かれにくい子どもや関わりの難しい子どもに対して、適切な関与を共に考えていけるように地域での支援機能の向上を目指すことを目的としている。子

どもの行動を観察し、気になる行動の原因を探索、支援を考えることによって園職員の行動理解と支援技術を促進している。

本年度は全 12 回の実施とし、保護者への質問票配布・返信を行う BASIC と、それらを行わず園内研修として行う LITE の 2 通りから各園が選択できる形とした。募集は幼稚園・保育所(園)・認定こども園を対象とし、文書配布により行った。12 月時点で、全ての園での実施が終了している。

【実施園】

- ・幼稚園 2 区(緑、美浜) 2 園
- ・保育園 3 区(稲毛、中央、緑) 5 園
- ・保育所 3 区(中央、花見川、美浜) 3 園
- ・認定こども園 2 区(緑、美浜) 2 園

【内 容】

- ・保護者への事前説明: 文書による趣旨説明 *
- ・保護者への事前調査: ご家庭で困っていること、気になることの確認 *
- ・集団場面での行動観察: 幼稚園での集団活動場面の様子を観察
- ・ミニ講座: 保護者を対象に趣旨説明と子育てミニ講座を実施 *
- ・職員と意見交換: 気になる子への対応方法などを協議
- ・保護者への報告: 各児への所見を支援センターで作成、園から報告 *
- ※LITE 実施園には意見交換の内容のまとめを作成し、園に送付
- ・保護者*、各園職員へアンケート
- ※*のついている項目は BASIC のみ実施(ミニ講座は園が希望した場合のみ実施)

【協力関係機関】

- ・養護教育センター ・各区保健福祉センター ・千葉大学教育学部
- ・千葉市療育センター 療育相談所 / すぎのこルーム / やまびこルーム /
相談支援事業所ぱれっと / ふれあいの家
- ・千葉市大宮学園 ひまわりルーム / たけのこルーム
- ・千葉市桜木園

【実施結果】

	形 式	人 数	障害の 診断あり※1	相談機関等 を勧める※2	対応方法 アドバイス※3
緑 区 A 園	LITE	6	0	0	6
美 浜 区 B 園	LITE	26	0	2	10
稲 毛 区 C 園	LITE	9	1	0	7
緑 区 D 園	LITE	18	1	3	10
中 央 区 E 園	BASIC	16	0	8	11
中 央 区 F 園	LITE	21	3	3	13
緑 区 G 園	LITE	15	3	1	10
美 浜 区 H 園	BASIC	40	3	7	20
緑 区 I 園	LITE	29	2	4	11
美 浜 区 J 園	BASIC	26	2	3	16
緑 区 K 園	BASIC	37	1	6	19
花見川区 L 園	LITE	29	1	7	17

※1「障害の診断あり」は、疑いも含む。

※2「相談機関等を勧める」は、相談継続中の場合は除く。

現時点での勧めではなく、経過観察後の様子によって勧める場合も含む。

※3「対応方法アドバイス」は、子育て全般に関しても行っている。

【考察】

昨年度に引き続き、子育てアシストBASIC・LITEの2つの形態で募集を行った。内訳としては、LITEでの実施が8園(うち初実施4園、実施経験あり4園)、BASICでの実施が4園(初実施1園、実施経験あり3園)であり、昨年度と比較するとLITE実施園が増加した。保護者の同意を得ることは難しい状況だが、保育者が子どもの発達に関する気がかりや、関わり方の難しさを感じている場合、LITEであれば申し込みやすいという特徴があると考えられる。

近年の特徴として、子育てアシスト実施後に改めてすすくサポートや講師派遣(実技中心)に繋がる例が多く見られる。LITEでの実施であっても、子育てアシストで子どもへの関わり方や保護者への伝え方について話し合ったことが契機となり、より個別的な支援に繋がるよう園と保護者の間で相談が進められた可能性が考えられる。経過観察や定期的な助言など、継続的な支援へのニーズの高さがあることが窺える。

(3)外部から講師派遣依頼を受けた研修(講義中心)

日付	名称	人数	内容
R01/06/11	障害児保育研修	200	場所:千葉市役所 内容:「インクルーシブ保育における保育実践について～気になる子への対応～」 対象:公立保育所、民間保育園等職員 講師:所長(相談支援員)仲村 美緒
R01/06/20	特別支援教育事例研究会	50	場所:植草学園大学附属弁天こども園 内容:事例研究～インシデントプロセス法による事例研究～ 対象:幼稚園、認定こども園 教諭 講師:所長(相談支援員)仲村 美緒、発達支援員 斎藤 幸佳 巡回相談員 田宮 真理子 稲葉 めぐみ
R01/07/05	施設職員研修	12	場所:ふたば保育園 内容:「発達障害とは?気になる子の援助について」 対象:保育士 講師:発達支援員 斎藤 幸佳、巡回相談員 田宮 真理子
R01/07/23	ワークシステムサポートプログラム	2	場所:障害者職業総合センター 内容:「発達障害について」 対象:ワークシステムサポートプログラム受講者 講師:就労支援員 川崎 正崇
R01/09/13	施設職員研修	8	場所:かがやきのまち都町教室 内容:「気になる子への理解と対応」 対象:児童発達支援事業所スタッフ 講師:発達支援員 斎藤 幸佳、巡回相談員 田宮 真理子
R01/10/03	施設職員研修	15	場所:千葉市黒砂保育所 内容:発達障害とは-気になる子への理解と対応- 対象:保育士 講師:発達支援員 斎藤 幸佳
R01/10/16	特別支援教育事例研究会	50	場所:植草学園大学附属弁天こども園 内容:事例研究～インシデントプロセス法による事例研究～ 対象:幼稚園、認定こども園 教諭 講師:所長(相談支援員)仲村 美緒、発達支援員 斎藤 幸佳、巡回相談員 田宮 真理子
R01/10/30	ちば地域若者サポートステーション講演会	31	場所:美浜区社会福祉協議会 内容:「生きづらさを抱える若者の自立・就労に向けて」 対象:15～39歳までの現在無業の若者とご家族、知人、支援者等 講師:就労支援員 川崎 正崇
R01/11/14	ワークシステムサポートプログラム	6	場所:障害者職業総合センター 内容:「発達障害について」 対象:ワークシステムサポートプログラム受講者 講師:就労支援員 川崎 正崇
R01/12/06	千葉市LD等通級指導教室10校合同保護者学習会	100	場所:千葉市養護教育センター 内容:「高校で受けられる支援」 対象:通級指導教室保護者、担当者 講師:所長(相談支援員)仲村 美緒

3. 普及啓発・研修

講演会や研修会により、発達障害に関する理解の普及啓発を図るものである。一般市民や関係者を対象とした啓発イベント・研修会を開催し、発達障害への理解浸透を図っている。

①主催講演会

日付	名称	人数	内容
R01/08/31	第1回発達障害講座 「発達障害者×はたらく」	173	場所:千葉市総合保険医療センター5階 大会議室 内容:「発達障害者×はたらく」 午前の部 講師:東京通信大学 松為信雄先生 午後の部 講師:千葉障害者職業センター 古屋いずみ氏 千葉県立障害者高等技術専門校 多田康一郎氏
R01/11/23	第2回発達障害講座 「発達障害児の理解と支援」	144	場所:千葉市総合保健医療センター5階 大会議室 内容:「発達障害児の理解と支援～幼児期の対応のポイントと保護者支援」 講師:千葉大教育学部准教授 真鍋健 先生

②地域住民等に対する普及啓発

日付	概略	内容
H31/04/13	第11回世界自閉症啓発デーinちば ～みんな大切な仲間です～	内容:キャラバン隊(寸劇、疑似体験)や自閉症の方たちのミニコンサートなど 作品展示、千葉県自閉症協会や各発達障害者支援センターの案内、パネル展示など 場所:きばーる1階アトリウム
R01/06/04	施設見学 千葉大学教育学部附属学校園、 千葉市生活自立・仕事相談 センター(稲毛)	千葉市発達障害者支援施設センターの概要説明
R01/10/09	施設見学 木村病院	千葉市発達障害者支援センターの概要説明、意見交換
R01/10/29	施設見学 植草学園大学、植草学園短期大学	千葉市発達障害者支援センターの概要説明
R01/12/05	施設見学 公明党市議会議員	千葉市発達障害者支援センターの概要説明

③関係施設・関係機関等の連携

日付	協議会名称	開催地	内容
R01/05/21	第1回特別支援連携協議会	ポートサイドタワー	(1) 開会 (2) 主催者挨拶 (3) 出席者紹介 (4) 報告・協議 ①特別支援連携協議会設置要綱について ②平成30年度第2回特別支援連携会議の議事録報告 ③令和元年度第1回特別支援連携協議会実務担当者会議の議事録報告 ④今年度の取組（案） ⑤その他 (5) 諸連絡 (6) 閉会
R01/06/19	第2回 千葉市地域意見交換会	千葉障害者就業支援 キャリアセンター	(1) SMBCグリーンサービス㈱千葉行部の採用のお願い (2) 報告・情報提供 全国就業支援ネットワーク「第21回定例研究会・研修会」 ・SDGsについて ・厚生労働省より (3) 求人案内 (4) 連絡事項及び情報提供
R01/07/03	千葉公共職業安定所管内 障害者雇用連絡会議	千葉公共職業安定所	(1) 開会 (2) 千葉公共職業安定所長あいさつ (3) 議題 ①職業紹介状況及び関係機関との連携について ②障害者雇用率制度について ③障害者虐待防止、障害者差別の禁止及び合理的配慮について (4) 情報交換・意見交換 (5) 閉会
R01/07/30	子育て支援ネットワーク 会議	千葉中央 コミュニティセンター	(1) 開会及び子育て支援館館長挨拶・幼保支援課課長挨拶 (2) 意見交換等 ①千葉市発達障害者支援センター巡回相談事業、出張相談、講師派遣事業について (千葉市発達障害者支援センターより) ②児童相談所の近況について(児童相談所より) (3) グループワーク(精神疾患及びその疑いのある保護者とそのお子さんとの関わりについて) (4) その他(幼保支援課より連絡事項)
R01/09/04	第2回特別支援連携協議会 実務担当者会議	養護教育センター	(1) 開会の言葉 (2) 報告 ①令和元年度第1回特別支援連携協議会の議事録報告 ②連携サポートリスト ③個別の教育支援計画アンケートの結果 ④総合案内パンフレットの確認 (3) 協議 ①各ライフステージにおける学校・教育との連携に関する課題について ②各課で行われている連携会議の内容・回数・参加者について (4) 諸連絡 (5) 閉会の言葉
R01/11/27	第1回精神・発達障害者 雇用支援連絡協議会	千葉障害者職業センター	(1) 開会 (2) 本協議会の趣旨について (3) 千葉障害者職業センターにおける支援実施状況 (4) 情報交換 (5) 閉会

4. サロン「しえるろっく」

発達障害の診断を受けており、診断名を告知されている 18 歳以上(高校生を除く)の方を対象とした茶話会を実施している。日常的な話題を中心としたコミュニケーションや、アナログゲーム等の活動を通じて自分を表現する力、他者を理解する力の向上を目的としている。参加人数は毎回 5 名程度である。全 8 回を予定しており、12 月末で 5 回終了している。

相談の終結や、就職等もあり、年間を通しての参加者は減少傾向にある。活動内容のマンネリ化も課題となっており、本年度は初回にサロン内で取り組みたい事を、参加者同士で話し合う機会を設けた。新たな活動として、ボッチャ競技の体験や創作を行った回では、参加者数の向上が見られ、チーム内で協力する、作品に参加者同士で意見を述べる等、コミュニケーションの拡がりにも繋がった。

5. ペアレント・トレーニング

発達障害児はその特性から叱責されることが多く、自信や意欲を失ってしまうことがある。ペアレント・トレーニングは発達障害のある子どもの行動を理解し、行動療法に基づく効果的な対処法を体験的に学び、よりよい親子関係づくりと子どもの適応行動の増加を目的としている。例年実施している ADHD の子どもを持つ保護者のグループの他、本年度は試行として ASD と診断された子どもを持つ保護者を対象としたグループも実施した。

○プログラム

【参加者】

- ・ADHD と診断された子どもの保護者 7 名(幼稚園児 5 名、小学生 2 名)
- ・ASD と診断された子どもの保護者 4 名(小学生 4 名) ※センター相談者のみ対象

【内 容】

セッション1	オリエンテーション 子どもの行動を3種類に分けてみよう
セッション2	肯定的な注目を与えよう ほめ方のコツ スペシャルタイム
セッション3	好ましくない行動を減らすー無視とほめるの組合せー
セッション4	子どもの協力を増やす方法①ー効果的な指示の出し方①ー
セッション5	子どもの協力を増やす方法②ー効果的な指示の出し方②ー
セッション6	子どもの協力を増やす方法③ーよりよい行動のためのチャートー
セッション7	制限を設けるー警告とペナルティーの与え方ー
セッション8	これまでのふりかえり

※ADHD グループ・ASD グループ共に、同じ内容で実施した。

ADHD グループは災害により初回が順延となった為、セッション 7・8 回をまとめた全 7 回の実施とした。

【考 察】

本年度は ADHD グループと ASD グループの 2 つのグループで、同一のセッションを行った。各グループ共に活発な意見交換が行われ、終了後の感想では「親の希望ではなく、実際の子どもの姿にあった基準で、できている所を見つけられるようになった」「25%で褒めるようにしたら親子の関係が良い方に変わった。」など肯定的な意見が多く挙げられた。また、同じ悩みを抱える保護者同士の交流を期待して参加された方が多く、実際にグループの終盤では、徐々に受講者同士で悩みを打ち明けたり、情報を共有している場面が多く見受けられた。

現在行っているプログラムは、本来 ADHD の子どもを持つ保護者を対象として開発されたものであるが、子どもの行動に着目し、それぞれの行動に対して具体的に対応できるスキルを身に付けるという本プログラムの内容は、ASD の子どもを持つ保護者に対しても有効であることが確認できた。

ADHD グループは 7 名での実施だったが、家庭や仕事の都合で、全員が参加できたセッションは 1 回のみであった。また共働きや一人親家庭などで、参加したい気持ちはあるが都合が付きず申し込めないという方も増加している。隔週・全 8 回という構成自体が現代の保護者にとって負担が大きく、参加者減の一因になっているのではないかと思われる。

○リーダー養成研修

【参加者】

- ・基礎研修 児童発達支援事業者、放課後等デイサービス事業者 18 名
- ・実務研修 児童発達支援事業者、放課後等デイサービス事業者 3 名

【内 容】

- ・基礎研修 講義形式で各セッションの概略を説明
- ・実務研修 ADHD グループのセッション全 7 回を見学、その後に内容を説明

【考 察】

リーダー養成研修は本年度で 4 年目を迎え、実務研修修了者は全 15 名となったが、未だ発達障害者支援センター外でのプログラム実施に至っていないのが現状である。本年度より、実務研修参加者は抽選ではなく、ペアレント・トレーニング実施予定の有無と、職種・経験年数を加味して決定することとした。申し込み者の中に具体的な実施予定のある者はいなかったが、今後実施を検討している者を実務研修の対象とすることで、各施設で実施するとなると、どういった点が問題になるかなど、プログラムの運営に関する議論が活発に行われた。

実施が困難な理由として、例年参加者からは、実施のための時間や人員、場所の確保が難しいことが挙げられていたが、今年度の研修では、参加者を集めることや、等質なグループを構成することの困難さが話題となった。子どもの発達水準や障害特性が似通っていると、保護者相互の学びも深まりやすく、グループ運営が比較的容易になるが、障害種別やその程度が多様な児童が利用する児童発達支援・放課後等デイサービス事業所において、上記のようなグループを構成することは困難である。グループとしてのまとまりを保持しながら、多様な保護者に対応していくことは、初心のリーダーにとっては心理的負担感も大きく、実施を困難にさせている要因であると思われる。

ペアレント・トレーニング実施者を増やすという目的は達成されていないが、例年一定数の参加申し込みがあり、また数年に渡り複数のスタッフが研修に参加している事業所も多い。参加者の 7 割は、参加理由として「日常の支援に活かしたい」を選択しており、研修の本来の目的とは異なるが、支援者自身が児童や保護者に対する対応技術を学べる場としてのニーズは高いことが伺われた。